

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 日本語音節構造史の研究

氏名 肥爪 周二

本論文は、日本語の音節構造の歴史について、大きく「拗音論」「二重母音・長母音論」「撥音・促音論」「清濁論」の四部に分けて考察するものである。

本論第一部「拗音論」においては、日本語における「拗音（開拗音・合拗音）」の分布の偏りを手がかりに、いくつかの問題について考察を行う。

序章「拗音—その概念と分布の偏り—」において、「拗音」の概念規定をした上で、日本語（呉音・漢音・唐音・オノマトペ）における拗音の分布の偏りを整理する。

第一章「ア段拗音—拗音仮名『茶（茶）』をめぐって—」においては、日本漢字音（呉音・漢音）に、シャ・ジャ以外の単独ア段拗音が原則として存在しないことを指摘、中国原音に遡って問題を整理する。その上で、観智院本『類聚名義抄』の「茶（茶）」を様々な角度から検討して、拗音仮名「チャ」として扱うのが相応しいことを確認する。

第二章「ウ段開拗音の沿革」においては、ウ段拗音が原則としてシュ・ジュしか存在しなかったことを明らかにした上で、そのような分布の偏りが生じた理由を、開拗音の古表記であるア行表記が、ウ段においてのみ定着したためであるとの見通しを立て、シュ・ジュのみが例外になった理由、他の音形への波及、若干存在する例外などについて考察する。

第三章「唇音と拗音」においては、唇音のウ段拗音ヒュ・ビュ・ミュが、長く伸ばす形でも稀であること、同時に、唇音のオ段拗音がヒョー・ビョー・ミョーのように長く伸ばす形でしか存在しないことをめぐり、呉音と漢音のそれぞれの場合について考察する。

第四章「拗音と韻尾の共起制限」においては、キャン・キャイ・キャツなど、拗音と前寄韻尾（-m, -p, -n, -t, -i）の組み合わせが、シュン・ジュン・シュツ・ジュツしか実質的に存在しないことについて、第二章での議論を踏まえつつ、朝鮮漢字音と比較しながら検討し、これが見かけ上の共起制限に過ぎないことを論じる。

第五章「合拗音の受容」においては、日本漢字音において、開拗音と合拗音の受け入れ方（分布・表記・歴史）が根本的に異なることを指摘し、開拗音は「分解圧縮法」、合拗音は音素結合の《あきま》に嵌め込む形で受け入れたとする解釈を提案する。

付章「サ行子音の音価とサ行開拗音」においては、日本語史上、サ行（ザ行）開拗音が特殊な振る舞いをしてきたことを、サ行子音の音価（調音位置・調音法ともに幅があった）の問題と絡めて考察し、サ行（ザ行）開拗音が、他の行の開拗音と、カ行（ガ行）合拗音との双方に通じる性質を持っていたことを明らかにする。

第二部「二重母音・長母音論」においては、/CVV/音節の歴史を考察する。

第一章「/CVV/音節（二重母音）の歴史」においては、特に二重母音/CVU/が長母音化してゆく経過について整理する。この大きな流れに連動して、アヤワ三行の統合、開拗音の日本語音韻体系への定着、合拗音の整理が起り、日本語の音節組織は、五十音図的体系から拡大五

十音図的体系へと組み替えられたことを論じる。

第二章「長母音成立の音韻論的解釈」においては、現代語に存在する引き音素/R/の成立について考察する。第一章で扱った二重母音/CVU/の長母音化の問題を、体系的見地から音韻論的に解釈し直し、引き音素/R/の成立の時期はオ段長音開合が統合された時点であり、それ以前はすべて二重母音と解釈すべきことを主張する。

第三章「江戸語の連母音音訛」においては、江戸語における二重母音/CVJ/の長母音化の問題を考察する。つまり、江戸語のある位相においては、古代語のすべての二重母音音節が長母音化するものであり、これらを総合的に整理した。

第三部「撥音・促音論」においては、日本語における/CVC/音節の歴史を考察する。

第一章「二種の撥音便」においては、平安時代の撥音便に、m音便とn音便の二種があったとする中田祝夫説に対する修正案（n音便→音価無指定の量的撥音便）を提出する。それにより、現代語の撥音と促音との非対称性についても、合理的に説明が可能になることを論じる。

第二章「m音便とウ音便」においては、複数の撥音音素の統合の歴史に関わる先行研究を検討し、「ウ」で表記される第三の撥音の位置づけについて、複数の証拠を挙げることによってその存在を裏付け、本論文の立場からの解釈を提示する。

第三章「リ延長強勢オノマトペー「ひんやり」「ふうわり」から「ひんやり」「ふんわり」へー」においては、現代語オノマトペに見られる「ひんやり」「ぼんやり」「ふんわり」「やんわり」のような、接近音の前の撥音挿入が、江戸時代以降に現れる新しい形であり、古くは「ひんやり」「ふうわり」等であったことを指摘し、そのような変化が生じた理由の一つとして連声現象の衰退を挙げる。加えて、「*ゆんらり」「*ふんらり」のようなラ行音の前の撥音挿入には類推が及ばなかった理由も検討する。

第四章「撥音と鼻音韻尾」においては、借用語音韻論の立場から、第一章・第二章で提示した本論文の撥音史の枠組みを前提に、漢字音の三種の鼻音韻尾（m韻尾・n韻尾・ng韻尾）が、日本語に三様に受け入れられていったことを明らかにする。特にn韻尾の不安定性が、国語音の量的撥音便に性質に対応していることを明らかにする。

第五章「ng韻尾・清濁の表記の相関」においては、濁音が清音の変種と把握されていたのと同様に、漢字音のng韻尾が母音の変種として把握されていたと指摘し、表記などの上でも平行関係があることを、さまざまな資料から明らかにする。

第六章「ng韻尾の鼻音性—㊦イの形を取る場合—」においては、ng韻尾の鼻音性標示が「～ウ」に対応する場合に偏り、「㊦イ」に対応するものについては稀であることをめぐり、中国原音の性質、連声濁現象などを検討し、その原因を考察する。その上で、古代音韻学の柱の一つである悉曇学において、漢字音の鼻音韻尾と対応させられる空点が、もっぱら「ム・ン・ウ」とのみ結びつきやすかったことが原因であったとする解釈を提出する。

第七章「Φ音便について」においては、撥音便において、音価の固定したm音便と、後続音に依存する量的撥音便が存在したとする第一章での主張を押し広め、促音にも音価が固定したものがあつたのではないかと予想を立てた。そして、その候補として、一部の文献資料においてハ行四段動詞の音便形が「ム」で表記される事例を取り上げ、それが築島裕の主張したΦ音便の表記だったとする解釈を提唱する。

第四部「清濁論」においては、日本語の清濁の対立に関わる問題を考察する。

第一章「清濁についての研究史—共通理解とすべき事柄—」においては、先行研究において

論じられてきた日本語の清濁に関わる諸問題（音配列制限・表記・前鼻音・連濁・連声濁・アクセントに似た性質・用語）を整理する。

第二章「ガ行鼻濁音の歴史」においては、伝統的な東京方言において鼻音性を維持しているガ行鼻濁音 [-ŋ-] の歴史を取り上げる。従来知られていなかった資料（山県大弐および行智の悉曇学資料）を紹介する。

第三章「連濁の起源」は、以下の三節からなる。

第一節「連濁の起源についての諸説」においては、従来の学説を大きく「同化説」「古音残存説」「連声濁説」に分類・紹介し、それぞれの問題点を指摘する。

第二節「内部境界強調説（再分割説）」においては、第一章で取り上げた日本語の清濁の対立が持つ諸特質、および、前節で指摘した従来の学説の問題点を、統一的に説明・解決できるような、第四番目の連濁の起源説（清濁の対立の起源説）を提案する。連濁現象は、その発生段階においては、弱化現象（同化説・連声濁説はこれに相当する）ではなく、語構成を明示するための強化現象、具体的には、結合標示のための声帯振動の継続と、語構成明示のための子音延長を両立するための「圧ぬき」の結果として、前鼻音が発達したのが、連濁の起源（同時に濁音の音声的起源）であったとする仮説である。

第三節「連濁をめぐる補説」においては、第二節において、論旨の見通しが悪くなるのを避けるために省略した数々の問題を、【補説①】から【補説⑱】として、本論文の立場から解説した。

第四章「龍麿の仮説」においては、上代語では、後項にあらかじめ濁音が含まれているときだけでなく、前項の末尾が濁音であるときにも連濁が阻止されたとする仮説を検証する。上代語においても濁音の連続自体を禁止する音配列則は存在しない以上、この仮説は疑わしく、実際に説得力を持つほどの証拠が存在しないことを明らかにした。

第五章「m音便の後の清濁」においては、「撥音便の後の清音は濁音化する」という見解を検証する。平安・鎌倉時代を中心とする資料を検討した上で、特にm音便の後では清音が清音のまま維持され得た可能性があることを主張した。